

Otsuma Ranzan
Junior & Senior
High School

あなたの未来は
あなたの選択で
つくられる

Your future is shaped
by your choices.



自ら
学び、
変わる。



SAT 2018
10:00~17:00

11.03

生徒の学びが変わる
授業づくり公開授業研究会2

- アクティブラーニングの取り組みと成果、そしてその先へ -



大妻嵐山中学校・高等学校

目次

目次、デザインシートのダウンロード . . .	P1
ご挨拶 . . .	P2
大妻学院理事長 伊藤 正直	
大妻嵐山中学校・高等学校長 真下 峯子	
基調講演講師 溝上慎一先生紹介 . . .	P4
本校の目指す教育と 3 年間の取り組み . . .	P5
研修会の振り返り . . .	P10
カリキュラムマネジメントに係るアンケートまとめ . . .	P11
アクティブラーニングのその先にむけて . . .	P15

デザインシートのダウンロード



学校のホームページからダウンロードいただけます。
配付期間は 2 週間となっております。(2018 年 11 月 22 日 (木))

<http://www.otsuma-ranzan.ed.jp/18designsheet/>

【ご利用にあたってのご注意】

公開授業で使用したレジュメおよび資料に関して、商業目的での複製をはじめ、無断転載、派生物の作成など、私的利用での範囲を逸脱して、使用することはご遠慮ください。

第2回公開授業研究会に際して

学校法人大妻学院

理事長 伊藤 正直

大妻嵐山中学校・高等学校は、「グローバル化時代を学祖大妻コタカのごとく、たくましく切り拓く力の育成」を目指して教育活動を展開しています。これをさらに強力に推進するために、3年前より「アクティブラーニング指導基盤整備・強化事業」として、生徒たちが学びにアクティブに取り組む授業への転換を目指し、溝上慎一先生（桐蔭学園理事長代理）、中原淳研究室（立教大学（前東京大学））、河合塾教育イノベーション本部教育研究部のご協力をいただき共同研究を推進してまいりました。

これまで積み重ねてきた「アクティブラーナーを育てる」授業改革の取組を広く知っていただくとともに、皆様から「授業を通して生徒の中に育てるもの」について様々なご意見をいただき、これからの時代を切り拓く力の育成を目指す教育を考える公開授業研究会を昨年に引き続き実施いたします。

大妻学院は、創立者大妻コタカが、女性の自立を目指し、裁縫・手芸の私塾を開設、現在5学部からなる大学、短期大学部、大学院人間文化研究科と、4つの中高を擁する女子総合教育機関となっています。創立者大妻コタカは、「自己を正しく認識すること」、「自ら学ぶ」こと、「精神的な自立」を実現することが大切ととらえ、自らも生涯、女子教育界で力強いリーダーシップを発揮し、行動しました。

現在、ICT、AIを初めとした科学技術が次々と進化する一方、自然環境や食糧、国や地方による生活レベルの格差、エネルギー問題など多くの課題が顕在化しております。それらを解決しながら、「持続可能な社会」を創ることが求められているこの現代においても、大妻コタカの教えは生きた指針となりうるものです。

2年半の取り組みの成果を踏まえ、生徒一人一人の能力の伸長のため、さらに充実した授業や研究・研修、さらにアクティブラーニングの先を見つめた生徒たちの能力育成を目指して、皆様と意見交換をさせていただきたいと考えております。

本研究会が、大妻嵐山中学校・高等学校にとっても、ご参加の皆様方にとっても実りあるものとなるよう、ご支援、ご協力をお願いいたします。

「知ること」「考えること」「行動すること」につなげる力に

大妻嵐山中学校高等学校長 真下 峯子

公開授業研究会にご参加いただき、心より感謝いたします。

河合塾教育研究部のご協力を得て、これまで3年にわたり、「生徒の学びを変える」授業力向上のために、全教職員が研修・研究に取り組んでまいりました。本日の公開授業研究会では、中学校全学年と高等学校1年、2年の全授業を公開し、ご参加の皆様と「授業を通して生徒にどんな力をつけるのか」を主テーマとして意見交換を行い、生徒の学びのスタイルの変容につながる授業に深化させたいと考えております。

また、溝上慎一先生の基調講演を受けてアクティブラーニングのその先に、どのような授業実践に向かうのかも合わせて一緒に議論させていただける会を目指しております。

この教員研修・授業研究に取り組む課題意識は、着任後から続けた授業観察の中で、受動的な生徒の学びを多く目にしたことから出発します。本校の生徒たちは「教員の指示に従い、与えられたことにコツコツ取り組み、丁寧にノートを取る」真面目な学習スタイルを持っています。しかし、この学びのスタイルだけでは学ぶことの面白さまで到達できていないのではないか、「自ら取りにいく能動的な学び」に変えることが生徒たちの力のさらなる伸長につながると考えたことから始まりました。そのためには学校の授業スタイルをどのように変えていくことが必要なかを、エビデンスを基に全教職員で改めて考える必要がありました。

「知ること」、知ったら「考えること」、考えたら「行動すること」、これはいつも生徒たちに話をする基本にしている言葉です。そして私たち学校の仕事は中高生の学びを「知ること」を元に「考え」「行動する、できる」ことに繋げ進化させることだと考えています。

新学習指導要領は新しい時代に生きる生徒たちの「対話的で、主体的な深い学び」を求めています。「学ばない人からは人は学ばない」を合言葉に続けてきたこの研究の成果により、本校教員の授業デザインが変わる。その授業を受ける生徒たちの学びが、世の中の課題を自分で見つけ、解決する意欲を持ち、アイディアを出し、仲間と協働して行動できる力につながるこれがこの3年間の目標です。

本校の研究に、ご参加の皆様の実践、ご経験での知見をいただき、本研究会がそれぞれの教育の場での実践に資するものとなることを心から願っております。

基調講演

「アクティブラーニングのその先へ」



溝上 慎一 先生

Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長代理

桐蔭学園トランジションセンター 所長・教授

1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学高等教育教授システム開発センター助手、2000年講師、2003年京都大学高等教育研究開発推進センター准教授。2014年教授を経て、2018年9月より現在に至る。京都大学博士（教育学）。

日本青年心理学会常任理事、大学教育学会常任理事、『青年心理学研究』編集委員、『大学教育学会誌』編集委員、“Journal of Adolescence” Editorial Board委員、学校法人河合塾教育イノベーション本部研究顧問、中央教育審議会臨時委員、大学の外部評価・AP委員、高校のSGH/SSH指導委員など。日本青年心理学会学会賞受賞。

専門は、心理学（現代青年期、自己・アイデンティティ形成、自己の分権化）と教育実践研究（学習と成長パラダイム、アクティブラーニング、学校から仕事・社会へのトランジションなど）。著書に『自己形成の心理学―他者の森をかけ抜けて自己になる』（2008世界思想社、単著）、『現代青年期の心理学―適応から自己形成の時代へ』（2010有斐閣選書、単著）、『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』（2014東信堂、単著）、『アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性』（2018東信堂、単著）、『高大接続の本質―「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題―』（2018学事出版、編著）など多数。

本校の目指す教育と3年間の取り組み

本校は大妻女子大学の付属校として、学祖大妻コタカ先生の教えを土台にして、生徒の人格の陶冶をめざし、一人一人の進路実現のための学力の育成に取り組んできた。

2015年度、建学の精神「学芸を修めて人類のために」を踏まえ、グローバル化の時代を学祖大妻コタカ先生のごとく逞しく切り開いていく力を育てるために、中期経営計画を策定し、以下の5つの目標を設定した。

①目指す学校像を「世界につながる科学するところ、表現する力」を育てる「グローバル・エコサイエンススクール」と定め、実現に向けて具体的に学校づくりを推進する。

育てる力：「世界につながる科学的素養」「世界につながる表現する力」
「世界につながる心と感性」「世界につながる進学力」

②社会に貢献できる知識・技能を持ち、「持続可能な社会」の実現に貢献する生徒を育てる。

③より魅力と特色のある教育活動を進めるための計画を策定する。

④教職員が一致団結し、嵐山校の困難な状況を乗り越え、社会の教育力の活用を図りながら埼玉県私立女子高としての確固たる地位を再構築する。

⑤ボーディングスクール構想実現のための具体的な行動を開始する。

これら5つの目標実現に向けて共通して取り組むべき最重要課題を学力の向上とし、本校の教育活動全体を整理し、生徒の学びの姿勢を変え、生徒の変容を目指してアクティブラーニング型授業の導入を開始した。

「中期経営計画に基づく本校が目指す教育の全体像」



生徒の学びを変えるために

1 生徒の実態

本校の生徒はまじめである。授業は私語なく淡々と静かに進み、生徒はおおむね先生の言うことをよく聞き、板書された事項はきちんとノートをとる。しかし、その真面目さは、教えられたことを疑問なく受け入れるだけの真面目さである。しかし、基礎学力が定着していないため、模試などの実力テストでの成績は伸びず、自らの学力に自信を持ってない。こうした教科学

力定着への課題は、2016年度から実施してきたジェネリックスキル測定テスト「学びみらいPASS」からも指摘されている。

一方、同テストによれば、本校生徒のリテラシーとコンピテンシー能力は非常に高いと判定されている。こうした生徒が持つ特性を生かしながら、従来の受け身型の学びを変えて生徒の教科学力向上を図り、ひいてはそれを生徒の自信につなげる授業改善が急務となってきている。

2 アクティブラーニング（AL）型授業の導入

近年、高大接続改革・大学入試改革・学習指導要領改訂が進められ、「主体的で対話的な深い学び」へ、「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶのか」、「〇〇を指導する」から「〇〇を『身につけることができるように』指導する」ことなどが求められることとなった。

こうした状況を踏まえ、かつ本校生徒の特性を生かしながら、生徒の学びを変容させるためには、AL型授業の導入を大きな柱として、組織的・系統的な授業改善に取り組む必要があるという認識のもとに、2016年度から3年計画で取組を開始した。

（1）2016年度取組

取組は、下記のように進めた。学校全体で取り組むため、担当教頭が司令塔となり、そのもとで、各校内組織がそれぞれの役割を果たす形で実施した。

【全体の目的等】

1 目的

大妻嵐山中学校・高等学校の教育確立の一環として、今後求められる力の育成のための授業改善を進める。

2 研修の方法

- （1）河合塾教育イノベーション本部教育研究部の協力を得る。
- （2）研修指導者を河合塾研究開発職の成田秀夫氏に依頼する。
- （3）今後求められる力を測る指標として、ジェネリックスキルを測定する河合塾の「学びみらいPASS」を使用する。
- （4）併せて、今後の高大接続を視野に入れ、高校での学びを蓄積するポートフォリオの研究を河合塾と進める。
- （5）目的を達成するに3年計画で実施する。

3 研修の校内推進組織

- （1）企画・運営については、ICT・AL委員会が担当する。
- （2）学力向上の視点から、進路指導・学習指導部、各教科主任と連携して進める。

【研修の目的・目標】

1 目的

教員がアクティブラーニング型授業（以下、AL型授業）の背景・意義を理解し、AL型授業に取り組めるようにする。

2 目標

- （1）生徒のアクティブラーニングが求められている背景と意義を理解する。
- （2）AL型授業の具体例について理解する。
- （3）授業の中に部分的にAL型授業を取り入れる。
- （4）AL型授業をふくめた授業デザインができる。
- （5）AL型授業をふくめて授業改善ができる。



【実施内容】

回	月	日	時間	内 容
1	6	29	90分	アクティブラーニングの背景、アクティブラーニングとは？
2	7	22	90分	①高校生の能力を多面的に育成・評価するために。 ②「学びみらいPASS」の紹介
3	8	3	90分	アクティブラーニング型授業の体験と導入の課題
	9	2	1日	「学びみらいPASS」の実施（高1～高3の全員）
4	10	5	70分	授業案の作成：ALを組み込んだ授業設計
	10	12	50分	「学びみらいPASS」生徒対象フィードバック講話
5	11	9	90分	アクティブラーニングに向けた教材の選定のポイント
6	12	21	90分	①有意義な授業研究を進めるために：模擬授業 ②「学びみらいPASS」の結果と、そこから見えてくる課題と実践に落とし込むためのポイントについて
7	2	1	90分	アクティブラーニングをいかに評価するのか

【校内公開授業】

◆タブレットを使ったグループ学習（数学）



◆課題を解くために実験・発表（理科）



【大妻嵐山の授業づくりの共通方針の策定と共有】

2016年度末、1年間の取組を総括し、次年度の授業改善のために、全教員が考え方、方針の共通認識を持つために、以下のような「大妻嵐山の授業づくりの共通方針」を策定した。



(2) 2017年度の取組

2017年度は、前年度の取組の成果を踏まえて、研修はより実践的なものとする、AL型授業を全校展開すること、授業改善を組織的に進めるための教員間の協働を促すことなどをねらいとして、下記のように実施した。そして、成果を外部に発表することで、これまでの教員一人一人の実践検証の機会とし、さらなるブラッシュアップを図っていくこととした。

【研修の目的・目標】

1 目的

A L型授業を全校的に展開し、継続的な授業改善を通して、学校全体の教育力を向上させる。

2 目標

- (1) 研究授業、研修を通して、他の教員と協働することができる。
- (2) 引き続き「学びみらいP A S S」を実施し、成果の検証を行うとともに、継続的な授業改善をすることができる。
- (3) 11月に外部に向けて公開授業・研究協議会を行う。
- (4) 4学年（中1～高1）全生徒がi P a dを携帯するため、I C Tを活用した授業を展開する。

【実施内容】

回	月	日	曜	時間	内 容
1	5	31	水	90分	マイクロティーチング (MT) 教員 3 名
2	6	21	水	90分	課題解決ワークショップ
3	7	21	金	90分	マイクロティーチング (MT) 教員 3 名
4	8	2	水	90分	課題解決ワークショップ
	8	30	水	1 日	学びみらいP A S S実施(高1年～3年)
5	9	27	水	90分	公開授業に向けた課題解決ワークショップ
6	10	11	水	90分	公開授業に向けた課題解決ワークショップ
7	11	11	土	1 日	外部公開授業・研究協議会
8	1	31	水	90分	公開授業の振り返りと次年度への課題抽出

◆研修 マイクロティーチング（6分間授業）



◆校内公開授業



課題を解くためのグループ活動（地歴公民）



科学論文発表会（中学3年）



(3) 2018年度の取組

2018年度は、今までの研修をより実践的なものにするために、若手教員を中核とする研修グループを作り、グループ内での公開授業や研究協議を密にしながらA L型授業のブラッシュアップに努めてきた。

また、グループ内の自主公開授業を数多く開催し、若手教員の指導力向上を図るとともに、A L型授業が全校で展開できるような風土づくりを目指した。

【研修の目的・目標】

1 目的

A L型授業を取り入れた継続的な授業改善を通して、自ら協働する教員集団を形成する。

2 目標

- (1) 継続的な授業改善をすることができる。
- (2) 主体的に他の教員と協働し、授業改善・研修を自主的に運営することができる。
- (3) 学校教育目標を達成するための授業デザインができる。
- (4) 生徒の活動を的確に評価できる。
- (5) 秋季に公開授業を行う。

3 具体的な研修内容

- (1) コア教員を中心とした小グループによるチーム内研修を行う。
- (2) 授業参観、10分間ティーチング、指導案検討会を通して授業改善を行う
- (3) 学校教育目標を達成するための授業デザインができる。
- (4) 公開授業に向けて自らの授業をブラッシュアップする。
- (5) 3年間の成果を何らかの形で成果として残す。

【実施内容】

回	月	日	曜	時間	内 容
	5	10	水		成田先生とコア教員の打ち合わせ 授業の柱の策定、評価の観点、参観の観点等目線合わせ
1	5	30	水	90分	コア教員による公開授業内容のプレゼン 日程・授業の見どころ、ポイント、参観のポイント等 コア教員を中核とするグループ作り
	5 6	31 20	木水		コア教員による公開授業および授業参観
2	6	20	水	90分	コア教員の公開授業の振り返り、グループ教員による研究 協議、次回模擬授業担当の指定
3	7	18	水	90分	チーム内の授業デザインシートのブラッシュアップ
4	8	1	水	90分	チーム内の授業デザインシートのブラッシュアップ
5	9	26	水	90分	公開授業に向けた授業デザインシートの検討
6	10	10	水	90分	公開授業に向けた授業デザインシートの検討
7	11	3	土	1日	外部公開授業・研究協議会
8	11	7	水	90分	公開授業の振り返り

◆グループ別研修の様子



【今後の方向性】

若手教員（コア教員）を中核とした、グループ別の研修・協議は活発に行われるようになった。小グループゆえに議論が活発化し、充実した研修となった。

今後、こうした研修の雰囲気を維持していくとともに、若手教員の自主的公開授業を継続しながら授業改善を図っていけるような風土を作っていきたい。一方で、ベテランの教員陣にも、若手教員の見本となる師範授業の公開を積極的に要請し、学校全体で自主研修が行われるように発展させていきたい。

研修会振り返りまとめ

1 今回の研修会において理解を深めた点

- ・授業の進め方やどのような活動を授業の中に入れるかを考えるのが主となり、生徒の評価という観点が抜け落ちていました。グループ内でも程度の差こそあれ、同じようなことを感じている先生もいて、グループ内での授業に関する様々な共有は大変ありがたかった。また、全体振り返りもなるほどと感じることは多く、この後の授業の組み立てに活かしていきたいと思った。
- ・生徒が意見を述べる機会がないと、理解を深化させることができないからALがあると思っていたが、今回、先生からAL＝理解のアウトプットであるという話を聞いて、なるほどと思いました。これまでの私の考えよりももう少し先を意識してALを取り入れなくてはならないと思いました。
- ・その時間に到達するゴール、到達したいゴールの設定はとても大切であることを理解した。
- ・生徒の授業内の取り組みに対して、随時形成的評価を入れて、授業を改善していくことが大切であると改めて気づいた。このサイクルを意識していくことで授業力が向上してくのだと思った。
- ・形成的評価のありかたには、かなり多様性があり、すでに無意識にやっていることも多々あると実感した。それをデザインシートに明記し、意識的に行うことがより良い授業の実践につながるのではないかと思った。
- ・評価を常に意識し、生徒が理解しているかしていないかを表情から見極めることが大切であると思った。

2 研修会を通して自己の授業改善に資することがありましたか？

- ・先生方の授業プランを伺い、ロイロノートやまなBOXをもっと研究して使ってみたいと思った。
- ・評価方法においては、常日頃からどんな形で評価していくのかという点について大妻嵐山全体の目線合わせをしていく必要があると思った。こ
- ・話し合いをすることが目的になってしまい、話し合いを柱に据える授業から抜け出せていない。知識をどのように身につけるか、研鑽を積まなければならない。
- ・知識や技能の習得後に、それらを活用して応用できるように授業を組み立てていきたいと思う。
- ・「授業目標の設定について」：生徒ができていること、できていないことを明確にすることによって 至当な目標が設定できることを学びました。私としては、授業目標を生徒に明確に示すために授業 開始時に板書していますが、教えたいという必要性の観点からのみの目標設定になっていたことに 気づかされました。今回の気づきを今後の授業に反映させていきます。
- ・他教科の先生が作成したデザインシートを、生徒の視点から見直した。大人も子供も「わからない」から「知りたい」という気持ちに変わりはなく、「わかる」と「楽しい」と再確認できた。自分が担当する授業時間において、生徒と同じような気持ちを抱かせてあげられているのかと問い続けることは授業力向上に欠かせないと痛感した。
- ・授業の基本は、生徒が「わかる！楽しい！」と感じてもらうことだと、原点に戻ることができた。
- ・形成的評価をしっかりと落とし込んだデザインシートにしていきたい。
- ・発問の仕方や生徒を観察すること等で意識的に形成的評価ができるようにデザインシートを改善していきたい。
- ・授業はスタートと到達目標が決まっているフローチャートのようなもの。「腹案」というより、場面 場面で適したものを選んでいきたい。
- ・アウトプットさせる状況をどのように設定するか、またそれを具体的にどのように評価するかが課題であると感じました。

3 今回の研修会の感想

- ・公開授業に向けては、大妻嵐山の取り組みがいかにか表面的なものではなく、真の学力育成に向けて前向きな取り組みであるのかを示すことのできる機会になればと思う。
- 評価方法など、学校全体としての課題は、まだあるにしても、生徒の学習が知性を使い、いわゆるALの求める主体的で協働的深い学びを体験しながら、高い学力の達成に至るのかということについて、ある程度の目途と方向性を持つことができるようになった。
- ・授業デザインシートという俎上に乗せるものがあり、研修会をさらに有意義なものにした。
- ・大妻嵐山の各教科において、「基礎学力が身につくAL」が開発されれば今後のアピール材料として 繋がっていくのではないかと感じました。また、「主体的で対話的な学び」については、これまでの 研修でだいぶ理解を深めることができてきましたが、「深い学び」については理解できていないので、 今後の個人的な課題として勉強していきたいと思った。
- ・普段行っていることをデザインシート化することの難しさを確認するとともに、デザインシートの書き方が見えてきた。

カリキュラムマネジメントに係るアンケートについて

1 アンケートの概要

3年間行ってきたAL推進の効果確認と、今後の更なる授業改善のために教員と生徒それぞれにアンケートを実施。教員には、教育目標や教科での目標への意識やALの取り組み具合など、生徒には、教育目標の浸透具合、教科の興味関心やALの参加具合などを質問。その集計結果の抜粋を報告する。なお、質問内容については、学校法人河合塾教育研究部が開発しているカリキュラムマネジメントに関するアンケートを採用した。

2 アンケート対象者

教員：中学1年生～高校1年生の担当教員 36名

【担当教科内訳】

英 語	9 名	社 会	5 名
数 学	5 名	保 健 体 育	2 名
国 語	7 名	技 術・家 庭	2 名
理 科	5 名	情 報	1 名

生徒：中学1年生～高校1年生の生徒 230名

【校種内訳】

中学校	131 名
高校	99 名

3 アンケート回答方法

当校が利用している e ポートフォリオシステム「まなBOX」のアンケート機能を用いて、web 上で回答。

4 アンケート実施期間

教員：2018年8月28日～9月2日

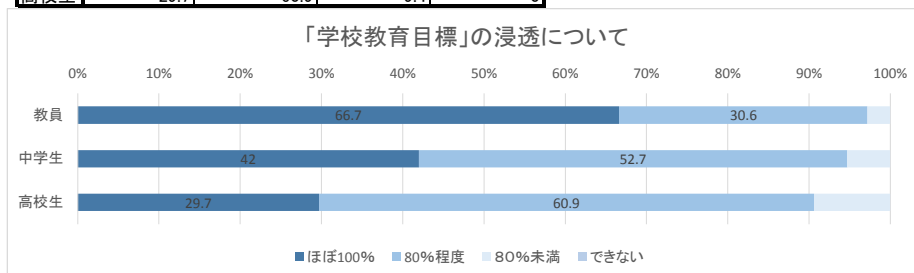
生徒：2018年8月28日

＜カリキュラムマネジメントアンケートまとめ＞

1 「学校教育目標」の浸透について

質問項目:「この学校でどんなことを身につけ、どんな人に成長していけるかについて、どのくらいの生徒がイメージできているか？」

回答(%)	ほぼ100%	80%程度	80%未満	できない
教員	66.7	30.6	2.8	0
中学生	42	52.7	5.3	0
高校生	29.7	60.9	9.4	0



「学校教育目標」について
中学生では約95%、高校生では約90%の生徒が学校教育目標を具体的にイメージできていると回答している。

一方、ほぼ全員の教員が、生徒は「学校教育目標をしっかりとイメージできている」と回答している。

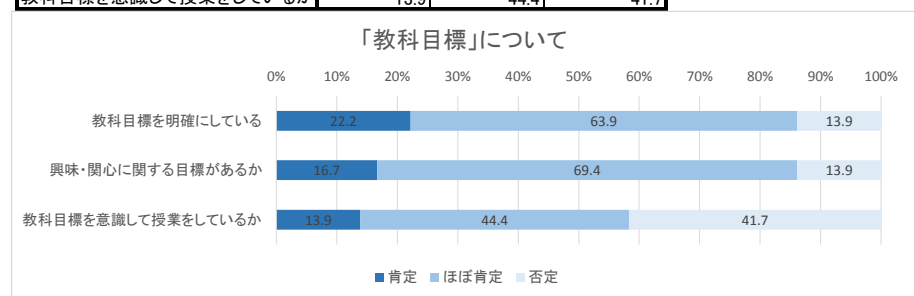
学校全体として、学校教育目標は共有・理解され教育活動が行われていると考えられる。

「教科目標」について
教科としては85%の教員が、教科として目標を明確にしており、またその目標の中に興味・関心を高めるような目標が含まれていると考えられている。

しかし、残念ながら授業の運営においては、常に教科目標を意識しているとは言えないという結果となった。授業改善の大きな課題の一つとして残る。

2 「教科目標」(対教師質問)について

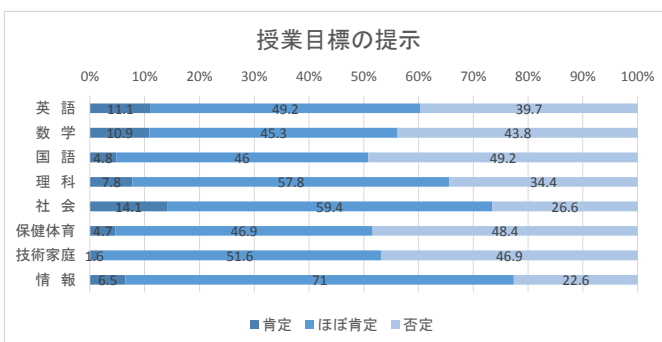
質問内容	肯定	ほぼ肯定	否定
教科目標を明確にしている	22.2	63.9	13.9
興味・関心に関する目標があるか	16.7	69.4	13.9
教科目標を意識して授業をしているか	13.9	44.4	41.7



3 「教科目標」(対生徒質問)について

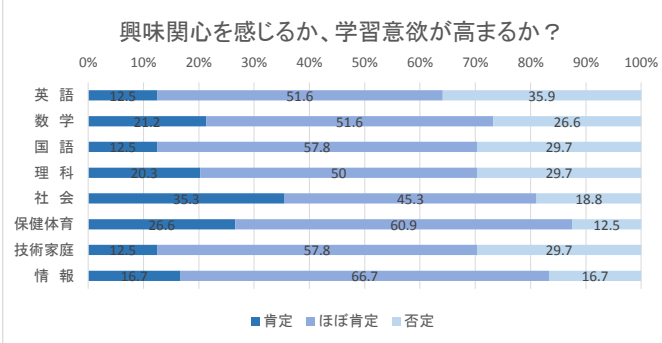
質問項目:「毎回の授業目標を教員から示されていますか？」

教科	肯定	ほぼ肯定	否定
英語	11.1	49.2	39.7
数学	10.9	45.3	43.8
国語	4.8	46	49.2
理科	7.8	57.8	34.4
社会	14.1	59.4	26.6
保健体育	4.7	46.9	48.4
技術家庭	1.6	51.6	46.9
情報	6.5	71	22.6



質問項目:「この教科の内容に興味を感じ、もっと知りたいと感じますか？」

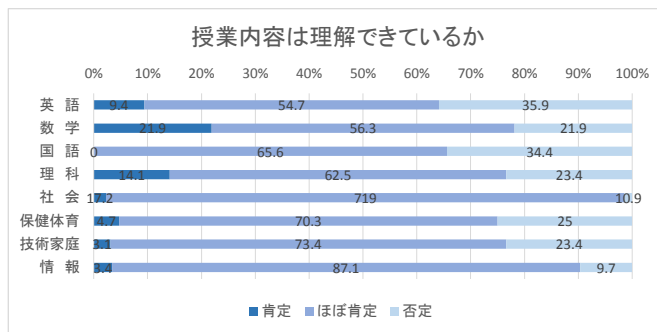
教科	肯定	ほぼ肯定	否定
英語	12.5	51.6	35.9
数学	21.2	51.6	26.6
国語	12.5	57.8	29.7
理科	20.3	50	29.7
社会	35.3	45.3	18.8
保健体育	26.6	60.9	12.5
技術家庭	12.5	57.8	29.7
情報	16.7	66.7	16.7



生徒は、各教科の授業において、概ね「教員から授業の目標が提示されている」ととらえている。また概ね7割以上の生徒が自らの「興味・関心が高まり、更にもっと知りたいと思う」と回答している。中学生もほぼ同様の回答であり、学校全体として教科指導は望ましい方向に進みつつあると判断できる。

質問項目:「この教科の授業内容が理解できていますか？」

教 科	肯定	ほぼ肯定	否定
英 語	9.4	54.7	35.9
数 学	21.9	56.3	21.9
国 語	0	65.6	34.4
理 科	14.1	62.5	23.4
社 会	17.2	71.9	10.9
保健体育	4.7	70.3	25
技術家庭	3.1	73.4	23.4
情 報	3.4	87.1	9.7

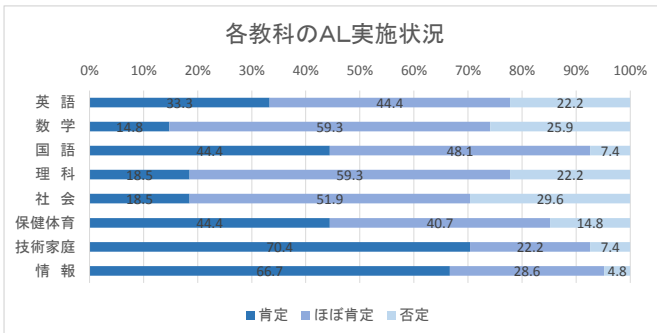


4 「ALの取り組み」(対生徒質問)について

質問項目:「この教科の授業ではALなどの学習活動が行われていますか？」

高校生

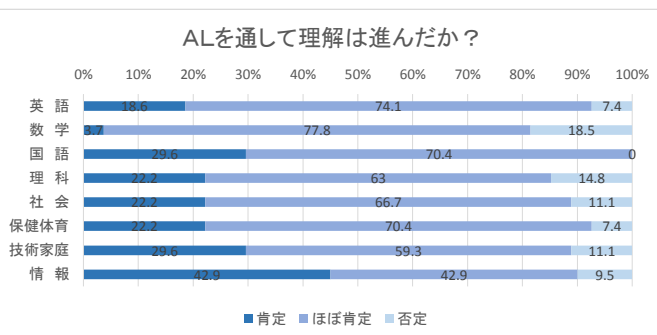
教 科	肯定	ほぼ肯定	否定
英 語	33.3	44.4	22.2
数 学	14.8	59.3	25.9
国 語	44.4	48.1	7.4
理 科	18.5	59.3	22.2
社 会	18.5	51.9	29.6
保健体育	44.4	40.7	14.8
技術家庭	70.4	22.2	7.4
情 報	66.7	28.6	4.8



質問項目:「この教科の授業でALを通じて理解できるようになりましたか？」

高校生

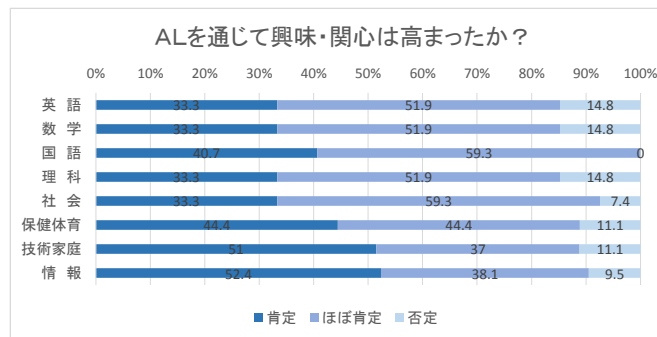
教 科	肯定	ほぼ肯定	否定
英 語	18.6	74.1	7.4
数 学	3.7	77.8	18.5
国 語	29.6	70.4	0
理 科	22.2	63	14.8
社 会	22.2	66.7	11.1
保健体育	22.2	70.4	7.4
技術家庭	29.6	59.3	11.1
情 報	42.9	42.9	9.5



質問項目:「この教科の授業でALを通じて興味・関心は高まりましたか？」

高校生

教 科	肯定	ほぼ肯定	否定
英 語	33.3	51.9	14.8
数 学	33.3	51.9	14.8
国 語	40.7	59.3	0
理 科	33.3	51.9	14.8
社 会	33.3	59.3	7.4
保健体育	44.4	44.4	11.1
技術家庭	51	37	11.1
情 報	52.4	38.1	9.5



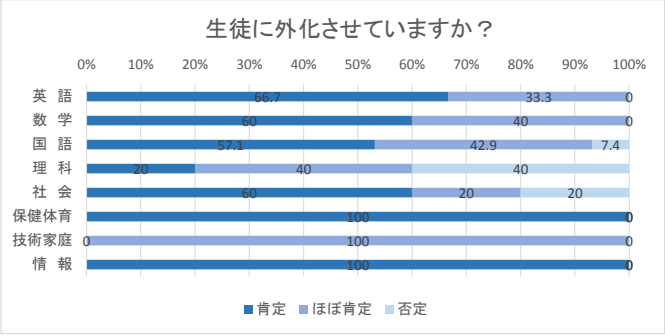
高校生アンケート(中学生もほぼ同様)の結果からみると、各教科においてAL等の学習活動は、着実に実施されている。またALを取り入れた学習活動で生徒の理解は進んでいるし、興味・関心も高まっているという回答結果を得た。これは本研究の成果を如実に顕すものであると考える。

5 「振り返り」(対教員・対生徒質問)について

質問項目:「授業の最後の振り返りで、生徒に自分の学びを外化させていますか？」

教員

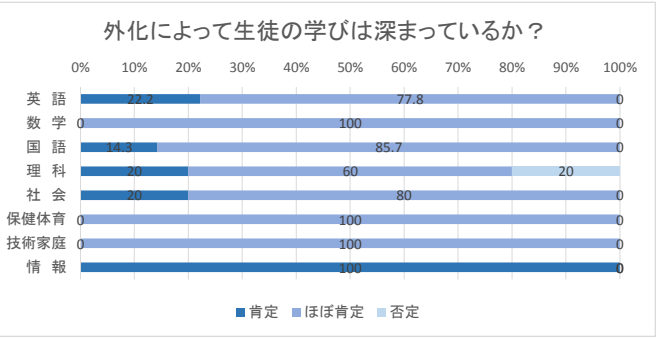
教科	肯定	ほぼ肯定	否定
英語	66.7	33.3	0
数学	60	40	0
国語	57.1	42.9	7.4
理科	20	40	40
社会	60	20	20
保健体育	100	0	0
技術家庭	0	100	0
情報	100	0	0



質問項目:「外化によって生徒の学びは深まっていますか？」

教員

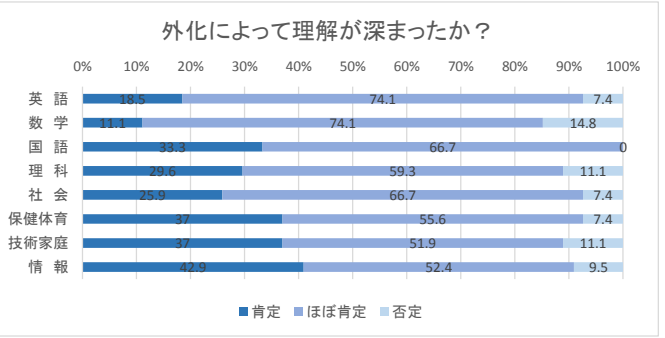
教科	肯定	ほぼ肯定	否定
英語	22.2	77.8	0
数学	0	100	0
国語	14.3	85.7	0
理科	20	60	20
社会	20	80	0
保健体育	0	100	0
技術家庭	0	100	0
情報	100	0	0



質問項目:「外化によってよりよく理解できるようになりましたか？」

教員

教科	肯定	ほぼ肯定	否定
英語	18.5	74.1	7.4
数学	11.1	74.1	14.8
国語	33.3	66.7	0
理科	29.6	59.3	11.1
社会	25.9	66.7	7.4
保健体育	37	55.6	7.4
技術家庭	37	51.9	11.1
情報	42.9	52.4	9.5

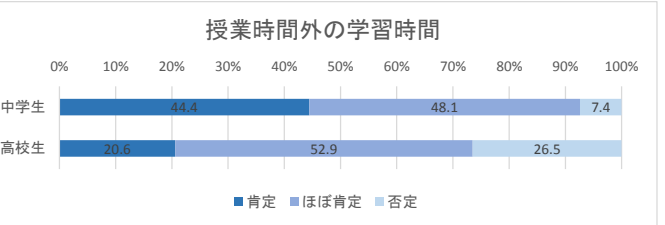


授業の最後の振り返りの言語化(外化)をほとんどの教員は実施しているし、その学習理解の定着に効果があると考えている。また、生徒も、外化をすることで理解が深まると回答している。

6 「授業時間外自主活動」(対生徒質問)について

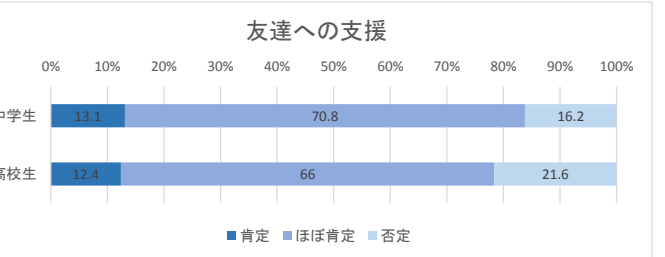
質問項目:「授業時間外で調べたり学んだりする時間が増えましたか？」

	肯定	ほぼ肯定	否定
中学生	44.4	48.1	7.4
高校生	20.6	52.9	26.5



質問項目:「友達への支援をしますか？」

	肯定	ほぼ肯定	否定
中学生	13.1	70.8	16.2
高校生	12.4	66	21.6



「授業時間外(放課後、自宅等)で、調べたり学んだりする時間が前年に比較し増えましたか？」の質問に対して、中学生では9割以上、高校生でも7割5分程度の生徒が肯定的な回答を寄せている。生徒の自主的な学習が増えていることはとても好ましい傾向であると考えられる。
また、ALの大きな効果の一つである「学び合い」についても、中高生とも8割以上が肯定的に答えており、ALの効果がこの面でも見られる。

アクティブラーニングのその先に向けて

成田秀夫（学校法人河合塾教育 開発研究職）

1. アクティブラーニング研修導入にあたって

高大接続教育・入試改革や次の教育課程をめぐる議論の中で、「アクティブラーニング（主体的・協働的な深い学び）」（以下、ALと略記）についての関心が高まり、河合塾主催や高校でのAL研修会に多数の高校教師が参加するだけでなく、自発的な勉強会などが全国で頻繁に行われるようになってきた。

しかし、ALについての断片的な知識や一時的な体験だけでは、なかなか継続的・組織的にALを実施するのは難しいといわざるを得ない。

そこで、河合塾教育イノベーション本部は、大妻嵐山中高校からアクティブラーニング型授業研修を受託するにあたって、以下の点について配慮した。

- 研修の丸投げにならないように、研修の目的・目標の設定、研修会の運営などについて十分に協議する。
- 学校や教員の現状を把握し、到達目標を達成するための体系的・継続的な研修計画を立案する。
- 研修において、教員相互の連携を高め、学校全体の組織開発に寄与する。

実際には、教頭を中心としたAL・ICT委員会と協議の上、下記のように3年間の研修を位置づけた。

2016年度 AL型授業を実施するために必要な知識を習得し、AL型授業体験する。

2017年度 AL型授業の授業案を作成し、実際に授業を行いブラッシュ・アップする。

2018年度 教員間の連携を高め、AL型授業を組織的・継続的に行えるようにする。

2. これまでのAL研修からみえてきた課題

2016年度の研修は、ALについては「目線あわせ」を中心に進めた。溝上慎一によるALの定義（「アクティブラーニングと教授学習法パラダイムの転換」2014）によれば、ALとは「一方的な知識伝達型の講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと」であり、「能動的な学習には、書く・話す・発表する等の活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」ということである。今までの学習指導要領の言い方を借りれば「言語活動」を授業の中に取り入れることであるとも言える。したがって、ALは今までの授業を否定するのではなく、その成果を踏まえ生徒の学びを社会へと橋渡しすることを目指すものである。付言すれば、溝上の定義はALのミニマム・スタンダードを示すものであり、教員のハードルを下げる意義を持っていると言える。

その上で、具体的なALの手法を目的別に4つに類型化し、取り組みを図った。

- ①知識・技能の習得を目指す「習得タイプ」
- ②習得した知識を活用して問題を解く「活用タイプ」
- ③知識や技能を複合的に活用して自ら問題を解決することを目指す「探究タイプ」
- ④様々な活動を通じて協働性や主体性を育む「活動タイプ」

それぞれのタイプについて具体的手法を学ぶと同時に、そうしたタイプに合った教材や活動の選び方を体験した。こうした分類は、教科におけるALの重要性を確認するのみならず、部活動や生徒会活動、あるいは学園祭や修学旅行なども含めた教育課程全体における生徒の学びの重要性を再確認するものである。

2017年度は、昨年度の研修の成果を踏まえ、個々の教員がAL型授業に取り組むために、AL型授業のデザイン（授業案の作成）とマイクロ・ティーチングを実施するとともに、公開授業に向けて教員が各々の授業をブラッシュ・アップすることを目指した。3人1組のグループになり、それぞれの授業案について説明・フィードバックを繰り返して行い、最後に各自が授業案を修正して提出した。

提出された授業案を分析し、次の研修でフィードバックするように心がけたが、次のような課題が浮き彫りにされた。

- ① 単元の目的と単元の評価基準の間の整合性が取れていない。特に学力の3要素の育成をどのように単元と結びつけるかという点が不十分である。
- ② ALの目的と活動が整合していない場合が見受けられた。ALを導入するタイミングとしては「講義：知識の理解（内化）→AL：知識の確認（外化）＋他者の考え→理解の定着・深化（内化）」というタイプと「AL：課題について考える（既有知識の外化）→知識不足を確認する→講義：知識の理解（内化）」などが考えられるが、ALの目的と活動を再確認することを促した。
- ③ ALにつながる「発問」が重要である。発問には、知識の確認、比較、動機・原因、影響、行動、発展、仮説、優先順位、総括などがあるが、②と関連して、どのような発問をすることが有効か、再確認するように促した。
- ④ ALの活動の「指示」が不明確であると、生徒の活動が円滑に進まないことが多いので、何をいつまでにどのようにやればいいのか、明確な指示を出すように促した。

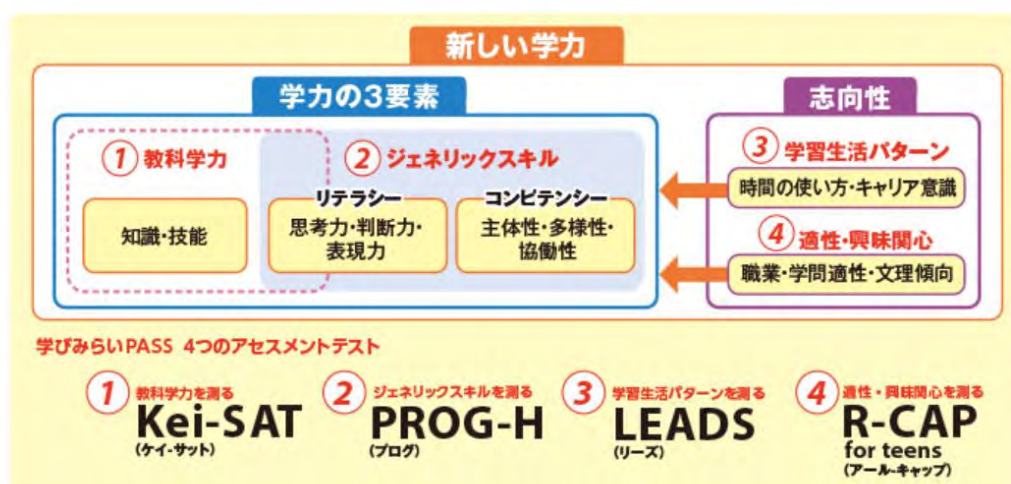
3. 2018年度AL研修の取り組み

2018年度の研修の目的は「教員間の連携を高め、AL型授業を組織的・継続的に行えるようにする」ということである。別の言い方をすれば、継続的な授業改善に向けて教員組織が「自走」することを目指した。そこで、新任の井上教頭先生の下、若手の教員を中心にALを推進する「コア・チーム」をつくり、現場が抱えている課題を吸い上げつつ、研修を進めることになった。コア・チームのメンバーが中心となって、5～6名で構成されるチームを作り、研修での協議のみならず、日常的な授業見学・意見交換を進める体制を整えた。

この間、多くの高校・大学において授業改善・教育改革を進める様子を見てきたが、成功している組織には共通性がある。それは「トッパーミドルー現場」が三位一体となって改革を進めているということである。現場の教員だけでは息切れすし、トップだけでは校長が替わると元に戻り、トップにやれと言われて何の支援もないミドルは途方に暮れるだけである。すなわち、「組織開発なくして、教育改革なし！」ということが大原則なのである。研修三年目に入り、自走する教員集団として改革を進める基盤が整ってきたと言えるだろう。

本年度の研修の初頭に、「学びみらいPASS」から見えてきた本校の課題を確認した。学びみらいPASSとは、学力の3要素と学びに向かう志向性を測定するテストである。（下図参照）

図 学びみらいPASSの構成



学びみらいPASSから見えてきた本校の課題は、地頭（リテラシー）も社会性（コンピテンシー）

も高いのに、教科学力が伸び悩んでいるということであった。そうした現状を踏まえ、本年度はAL型の授業を通して、次のように取り組みを進めた。

- (1) 一方的に講義をするのではなく、講義の内容について生徒が「書く・話す・発表する」という活動を必ず設ける。
- (2) 生徒の活動を通して、教員は生徒の理解度を把握し、授業の改善に役立てる。

また、これらを実現するために、次のことに留意することをお願いした。

①知識・技能の習得について

- ・内容：当該授業で身につける知識・技能はなにか
- ・方法：それをどのように身につけさせるか
- ・評価：身についたかをどのように確認するか

☞ 講義で知識を伝えることは大切ですが、講義の内容が定着できているか、授業内でどのように確認するのかという点に留意してください。

☞ このことをアクティブラーニングの観点から言えば、「認知過程の外化」になります。授業を聴いてわかったつもりでいる生徒が本当に分かっているのかをどのように確認してください。

②思考力・判断力・表現力

- ・習った知識を活用して問題を解くプロセスで、何をどのように考えさせ、判断して解答させるのかを明確にしてください。

☞ 習ったことを覚えさせるだけでなく、自分で考え、試行錯誤して解答するというプロセスを通して、模擬試験の問題や入試問題で得点が取れる力をつけるには、自分の授業でどのようにしたらいいかを明記してください。

③実技系の先生方へ

- ・実技の授業の中で培った協働性や主体性を、座学が中心となる教科の中でも発揮できるという観点からもお考えください。オール嵐山で学力を伸ばしていきたいと思います。

このように研修を進める中で、新たな課題も見えてきた。

ひとつは「指導と評価の一体化」である。「評価」というと、成績評価を連想しがちであるが、授業の目的に照らして生徒がどれだけ達成できているかを、授業の中でモニターしつつ指導できているのかと言うことである。これについては次のような確認を行った。

☞ 評価についての再確認

総括的評価：単元や学期末に行う「成績評価」→「評定」とも言う

形成的評価：想定した目標が授業の中で実現できているかを「途中で行う評価」

➤ 教員にとって

- ◇ 生徒の学びをモニターする→できていなければ再度説明する→授業や課題の難易度を調整する→次回以降の授業に反映する

➤ 生徒にとって

- ◇ 1コマの授業の中で身につけるべきことができているか自分の学びを振り返る→次にどうしたらいいのか行動変容につなげる

また、ふたつ目の課題は「生徒の深い学び」促すことができたのかということである。文部科学省は次期学習要領の中でアクティブラーニングを「主体的対話的で深い学び」と呼び変えているが、深い学びとは、単に学習内容を広く深く理解するということではなく、知識を「自分事」として身につけることである。そのために、授業の内容を反復確認するだけでなく、授業のリフレクションを通して自分なりに意味づけを行うことが重要になってくる。知識は、受動的に授業を聴いているだけではなかなか身につかない。自分の経験や今までに学んだことと結びつけ、自分が納得すること、まさに「腑に落ちる」ことが大切である。

アメリカの教育学者ジョン・デューイは『民主主義と教育』のかで、リフレクションの意義について「思考という要素を何ら含まないでは、意味を持つ経験はありえない」と述べている。知識注入型の近代的な教育観から、経験学習に基づく教育観へと転換させたデューイ本人が、ただ何かを経験するだけでは不十分で、そこに思考を加えなければならないと言っていることに、大きな意味がある。「教えられっぱなし」にするのではなく「経験をやりっぱなし」にするのでもなく、「経験」のあとに思考を加えることで、それに意味を持たせる—このときの思考こそが「リフレクション」である。

こうしたふたつの課題をクリアすることが「アクティブラーニングのその先」に向けた大きな踏み出しになるだろう。もはや、ALをALだけで語る時代は終わっている。「教育目標—カリキュラム開発—授業実践—評価」が一体となった教育改革が、PDCAサイクルのもとで着実に進められることが直面する新しい課題となっている。

4. 今後の課題

3年間の研修が今回の公開授業研究会で一通り完結することになるわけであるが、当初の予定通り、授業改善を継続的に行える教員組織の形成にむけた目処がつきつつあるが、今後に向けた方向性を確認しておきたい。

①アクティブラーニングのその先へ

アクティブラーニングをそれだけで語る時代は終わった。生徒にどのような力をつけさせるために、どのような授業・指導を行い、それをどのように評価するのかという「三位一体」の組織的な取り組みが必要になっている。

②エビデンスにもとづいたカリキュラム・マネジメント

生徒の学びと成長を、教員の勘と経験だけに頼るのではなく、それらを「可視化」し、エビデンスにもとづいたカリキュラム・マネジメントが必要とされている。本校においては「グローバル・エコサイエンス」を実現する資質・能力の形成と、それを支える教科学力の育成を、データにもとづいた「IR」として進めて行くことになる。

③教育改善を保証する組織開発

どんなに計画が素晴らしくても、ここの教員がそれに向けて動かなければ、絵に描いた餅になってしまうだろう。目標に向けて教員が連携し、互いに学び合いながら、教員組織として成長することが必要不可欠である。数年で教員が入替わる公立校に比べ、この点について私学はアドバンテージをもっている。昨年の公開授業研究会で真下校長が述べたように「学んでいる教員からしか生徒は学ばない」のである。

最後に、真下校長先生をはじめ本校の教職員のみなさまに感謝申し上げると同時に、本校の未来が輝かしいものであることを願って、私からの報告としたい。

Memo

今、
変わる。



大妻嵐山中学校・高等学校

〒355-0221 埼玉県比企郡嵐山町菅谷558
TEL 0493-62-2281 / FAX 0493-62-1138

大妻嵐山 

<http://www.otsuma-ranzan.ed.jp/>